ISSN 2186-9650

国立国際医療研究センター
国際医療協力局

明日の国際保健医療協力 magazine

NEWSLETTER

vol.6
2017

特集

国立国際医療研究センター

NCGMの何が国際なのか

グローバルヘルスの岐路と新たなニーズ

3 NCGM 国際医療協力局　NEW TOPICS

4 **NCGM の何が国際なのか**
グローバルヘルスの岐路と新たなニーズ

5 **NCGM のはじまり**
軍病院から国際的な総合医療機関へ

6 **グローバルヘルスの変化とともに広がる国際的な事業**
ここから世界に健康の架け橋を

6 数字で見る
NCGM のグローバルなところ

9 ハチ P が紹介する
NCGM のグローバルなところ

INTERVIEW
10 **医療の国際化に対応する「国際診療部」**
国立国際医療研究センター　国際診療部長　大曲 貴夫

INTERVIEW
16 **変革の時を迎える NCGM**
グローバルヘルス新時代を生き抜く
国立国際医療研究センター　国際医療協力局　連携協力部長　明石 秀親

22 **KEY WORDS for tomorrow**
NCGM のこれからを読むキーワード

24 EVENT information

今回は初の NCGM 特集です！
…え？いつも NCGM の活動を
紹介してるって？
いえいえ、今回は
ちょっと違うんです。
わたくし、
グローバルヘルス案内人、
ハチ P が
"ゆる～くて分かりやすい"
をモットーに
国際協力だけじゃない
NCGM の国際的な姿を
お見せしますよ～。

表紙：NCGM アトリウム

2017 年 4 月　長崎大学大学院　NCGM サテライトキャンパス開設！

2017 年 4 月、長崎大学大学院 熱帯医学・グローバルヘルス研究科の NCGM サテライトキャンパスが開設されます。NCGM は同研究科と学術交流協定を締結し、共同で国際医療・保健分野の人材育成に取り組んでいます。サテライトキャンパスでは、NCGM の知見を通じてグローバルヘルスの最前線について学べます。インターネットを利用して聴講でき、夜間・休日に登校して受講するので、社会人の方が仕事を続けながら東京で学位（修士）を取得することが可能です。

長崎大学大学院
熱帯医学・グローバルヘルス研究科
NCGM サテライト

《コース》熱帯医学コース／国際健康開発コース／ヘルスイノベーションコース
《特色》●世界トップレベルのロンドン大学衛生・熱帯医学校との連携●全コースで授業の完全英語化●多分野（人文社会学系含む）の学生を受入●世界トップクラスの外国人教員の招聘
入学の詳細は大学院 HP へ
http://www.tmgh.nagasaki-u.ac.jp/

NCGM 国際医療協力局　NEW TOPICS

ラジオ番組『グローバルヘルス・カフェ』オンデマンド配信中

国際医療協力局が企画するラジオ番組『グローバルヘルス・カフェ』（ラジオ NIKKEI ）では、とあるカフェを舞台に世界の健康問題について国際協力に詳しいマスターとお客様が語り合います。最近来店されるお客様はシンクタンク・ソフィアバンク代表の藤沢久美さん。多様化する国際支援の方法や、民間企業の海外進出と NCGM の活動についてお話します。

毎月第3火曜日17時より好評放送中です。番組公式 HP では、第 1 回からの放送をオンデマンドでいつでもお聴きいただけます。

グローバルヘルス・カフェ
ラジオ NIKKEI 第一
企画 : NCGM 国際医療協力局
出演 : 明石秀親（医師・NCGM 国際医療協力局 専門家）
藤沢久美（ソフィアバンク代表）
http://www.radionikkei.jp/globalhealth-cafe/

国立国際医療研究センター（NCGM）は、名前に〝国際〟がつくように、病院、研究、教育、途上国支援など、グローバルに幅広い活動を行っています。しかし、創立当時から国際的な特色を持っていたわけではありません。明治時代から続く医療機関は 150 年もの月日の中で国際的な組織へと変化を遂げ、岐路に立つグローバルヘルスとともにさらなる進化を求められています。国際協力だけではない、NCGM の国際的な取り組みを紹介します。

NCGM の何が国際なのか

グローバルヘルスの岐路と新たなニーズ

NCGM のはじまり

軍病院から国際的な総合医療機関へ

国立国際医療研究センターのはじまりは明治時代、兵隊假病院として設立された 1868 年に遡ります。陸軍の負傷兵を手当てする病院として誕生しました。陸軍医であり、文筆家の森鴎外が病院長を務めたこともあります。1929 年に現在地の東京都新宿区に移転した後、1945 年に厚生省（現 厚生労働省）に移管され、「国立東京第一病院」という名の国立病院として運営がスタートしました。↘

東京都新宿区に移転した頃の病院本館

国立東京第一病院

国立病院医療センター

1974 年に「国立病院医療センター」に改称し、組織再編を経て、少しずつ現在のような多様な事業を行う医療研究機関へと成長していきました。1986 年には、開発途上国に保健医療分野の支援を行う必要性の高まりを受けて、国際医療協力部が設置されました。

1993 年、現在の NCGM の前身である「国立国際医療センター」が創設 ↙

されると、エイズ治療・研究開発センター、国立看護大学校、国際疾病センター（現 国際感染症センター）が順に開設、さらに国府台病院の統合、肝炎・免疫研究センターの設置を経て、2010 年に独立行政法人化し、現在の「国立国際医療研究センター」に改称されました。病院事業だけでなく、医療人材の教育、国際医療協力、研究など様々な事業を展開しています。2015 年には国立研究開発法人となり、研究やシンクタンク機能を強化しています。

新築された国立国際医療研究センターの中央棟

グローバルヘルスの変化とともに広がる国際的な事業

ここから世界に健康の架け橋を

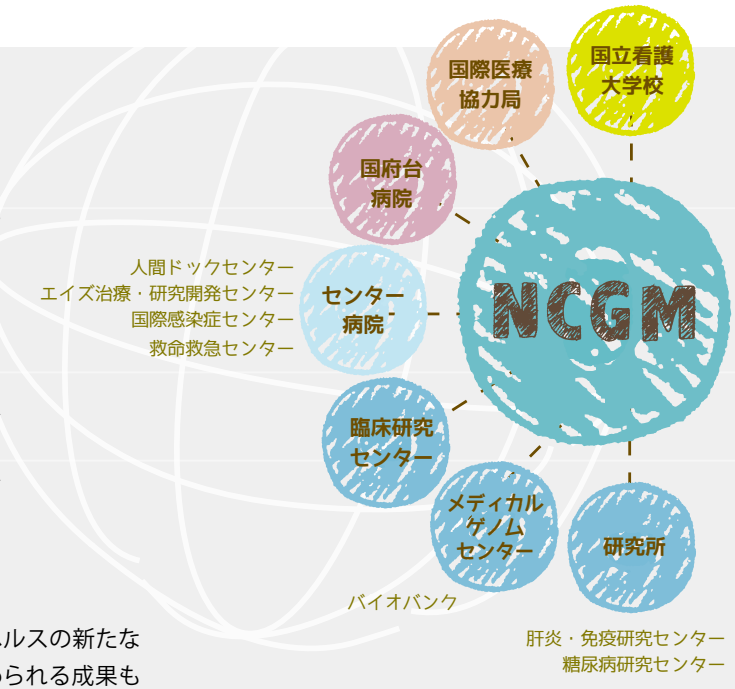
明治時代に軍病院としてスタートしたNCGMは、幾たびの組織改編を経て現在の総合医療を基盤とした国際的な医療機関に至っています。その背景にはグローバルヘルスの変遷と、果たすべき役割の変化がありました。

グローバルヘルスは、地球規模のレベルで人々の健康に影響を与える課題に対して、国際社会が協力しながら解決しなければならない分野のこと。2000年代までは開発途上国の保健医療を向上するために行う二国間援助が主流で、NCGMもODA（政府開発援助）による国際協力を進める日本の実施機関として活動してきました。

急速にグローバル化が進み、SARSや新型インフルエンザなど国境を越えた感染症が大きな課題となり、途上国支援のあり方も従来の二国間だけではなく国際社会全体での取り組みへと変わってきました。国連で世界の共通目標としてミレニアム開発目標（MDGs）が提唱されると、政府資金以外に民間財団の出資も活発になり、民間・NGO・国際機関・政府の援助機関など、さまざまな組織がパートナーシップを結ぶ取り組みが多く見られるようになりました。NCGMも保健医療分野の目標達成に向けて、国際医療協力局を中心に国際協力活動を続けながら、海外の研究機関や医療機関と協力協定を結び、共同研究や人材育成を行うための拠点を増やしていきました。企業との協働も増えています。

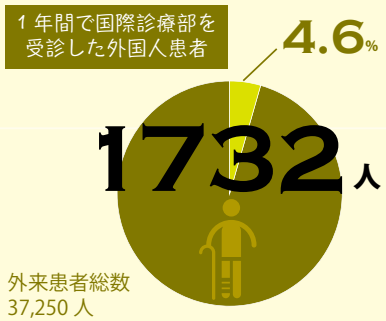
グローバルヘルスは今、誰もが医療を受けられるユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）の実現を目標にしています。国民皆保険制度によって世界に先駆けてUHCを実現したと言われる日本には、世界に貢献できる大きな可能性があります。一方、日本においても成長戦略の1つに医療の国際展開を掲げているように、グローバルヘルスは外交や経済の側面からも重要な位置付けになっています。

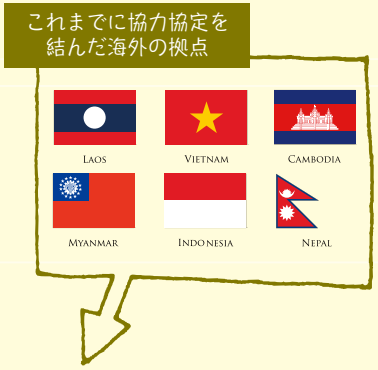
このようなグローバルヘルスの新たな潮流の中で、NCGMに求められる成果も変化してきています。新しい国際医療協力活動のニーズに応えつつ、各部門が連携してグローバルヘルスや国際展開に注力する方向へと転換する時を迎えています。



現在のNCGMの構成

数字で見る NCGMのグローバルなところ





国際的な事業って、
たとえばこんなこと。

A 国際診療部

センター病院に外国人患者さん専用窓口「国際診療部」を新設し、都内初の JMIP（外国人患者受入医療機関認証制度）の認証を取得しました。多言語診療や、宗教に配慮した食事、各国の保険手続きなどに対応しています。

B 国際感染症センター

国際的に脅威となる感染症の予防や危機管理対策を行っています。エボラ出血熱のような専門性の高い感染症の疑いのある患者さんのための診療体制も整えています。

C 人間ドックセンター

実は NCGM は人間ドック発祥の施設。2016 年に改装し、各種検査が 1 カ所に集約。外国からの健診ツアーの受け入れも行っています。

D トラベルクリニック

デング熱やマラリアなど、海外に行く時に注意しなければならない感染症があります。トラベルクリニックでは、海外渡航前健診や、ワクチン接種などの渡航相談を受けています。帰国後の疾患治療も行っています。2015 年度は 11,501 件の予防接種を実施しました。

E WHO 協力センター

NCGM は世界保健機関（WHO）の協力センター（保健システム研究と新興感染症対策の分野）に指定されています。WHO と連携して各国の保健システム強化や新興感染症対策を行っています。

F 臨床研究センター

インターナショナルトライアル部を設置し、海外の研究機関と共同で治験に取り組んでいます。

G 国際医療協力局

途上国に専門家を派遣して、感染症対策や母子保健、制度づくりなど、各国の保健医療をより良くする活動を行っています。

H 医療技術等国際展開推進事業

厚生労働省が進める「医療の国際化」事業。日本の医療従事者や企業の技術者を海外に派遣したり、海外から研修員を受け入れたりして、技術移転や製品の普及を目指す取り組み。国際医療協力局が事務局として、センターの多くの部門と連携して運営しています。

数字で見る NCGM のグローバルなところ

1 年間で海外の研究機関と結んだ共同研究協定

8 件

1 年間で海外から受け入れた研修員

433 人

1 年間で入院した外国人患者

586 人

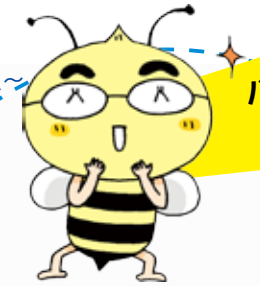
3.3%

入院患者総数 17,756 人

1 年間に実施した国際的な学会での発表

56 件

ハチ P が紹介する ～ NCGM のグローバルなところ～



まだまだいろいろあるんですよ～

ロゴマーク

NCGM のロゴマークは、国際的なセンターであることを象徴しているんだよ。青い楕円形は地球、白い波線は生命の鼓動を表しているよ。世界中の人々の健康を守る強い願いが込められているんだ。

国際庭園

ゆったりとしたスロープでちょっとしたお散歩が楽しめる「国際庭園」。春にはカラフルな花に囲まれる癒しのスポットです。

資料室

院内には歴史ある貴重な展示品の数々が並ぶ資料室もあるんだよ。スペイン風邪が流行した当時のカルテや、ノーベル平和賞を受賞したムハマド・ユヌスさんが訪問された時の様子など、国際的な資料も見学できるよ。

明治時代のカルテ。脳充血の診断が書かれているよ。

森鴎外の机
陸軍医学校長時代に愛用していた机があるよ。ホンモノだよ。

漁船「第五福竜丸」の模型
1954 年にビキニ環礁で水爆実験の際に被爆した乗組員が入院した縁で寄贈されたよ。

アート作品「生命」

センター病院には患者さんやお見舞いに来られた人たちの憩いのスペース「アトリウム」があるんだよ。この吹き抜けの天井からモビールがゆらゆらと揺れていて、ゆったりした空間を演出しているよ。このモビールは造形作家の姉歯公也さんの「生命」という作品。一つひとつの生命が形づくる地球を表していて、未来への時間と生きることや癒しへの願いを伝えています。

祈祷室 Prayer Room

イスラム教の患者さん向けに祈祷室があります。カーペットの上のマークはメッカ（聖地）の方角を示しているよ。

INTERVIEW

医療の国際化に対応する「国際診療部」

大曲 貴夫　国立国際医療研究センター　国際診療部長

年間 1700 名を超える外国籍の患者さんを受け入れている NCGM 国際診療部。立ち上げから 2 年が経ち、都内で初めて「外国人患者受け入れ医療機関認定制度（JMIP）」の認証も得て、外国人に優しい医療機関としての認知度も徐々に高まっています。その取り組みと展望を国際診療部の大曲貴夫医師に聞きました。

―― NCGM には国際診療部がありますが、このような外国人向けの窓口はセンター病院の設立当初からあるのでしょうか。

大曲　いいえ、国際診療部は 2015 年 4 月にできた比較的新しい部門です。背景としては、海外から日本に来られる方が増えるにつれて外国籍の患者さんが増えてきたという状況があります。当センター全体としても病院を国際化していくという方針を打ち出していますので、もっと「国際」という名が付いた病院らしい医療提供を行うために、外国人の患者さんへの対応がスムーズにできるような部門を作ろうということで立ち上がったのが国際診療部です。

――部門立ち上げ以前にも外国人の患者さんはいらっしゃったと思いますが、どのように対応されていたのですか。

大曲　国際診療部のような部門はなかったのですが、実際には外国人の患者さんを各診療科でドクターが個別に診察していました。外国人診療には、言葉の問題だけでなく様々な種類の保険に対応した事務手続きが発生しますが、誰に聞いても分からない中で医療スタッフが患者さんのご家族に通訳をお願いしたり、個人的に通訳を呼んできたりして、なんとか対応していたという状況でした。やはり外国人患者さんが増えてくると、そうした対応は医療スタッフにとって非常に負担になります。現場の努力だけでは限界がありますので、国際診療部という部門を組織に加え、体制を整える必要がありました。昨年、厚生労働省が進める「外国人患者受け入れ医療機関認証制度(JMIP)」の認証も東京都内で初めて取得しました。

――外国人にとっては「国際診療部があります」と掲げられている病院があるのはとても安心できますね。患者さんが外国人だと言語以外に日本人の患者さんを診療する場合と比べてどのような違いがありますか。

大曲　病気や治療は日本人も外国人も一緒です。ただ、外国人の場合は保険外診療で費用が全額自己負担になる方も多いので、日本人の患者さんよりも受ける医療の中身について注意深く見られる印象があります。つまり、どういう治療が必要で、どのような検査を受けるのか、そこにどれだけお金を支払うことになるのかということに対して意識が高い方が多いです。それだけに医療の中身も気にされますし、詳細を聞いた上で「私はその検査は受けません」と言われる方もいらっしゃいます。そこが一番大きな違いだと思います。病院側としては、言語対応や書類上の扱いが日本人患者さんと比べて少し手間がかかるという違いもありますが、医療の中身には違いを感じていないですね。

――国際診療部のスタッフは、そうした違いを考慮しながら診療をサポートするのですね。直接治療まで行うのでしょうか。

大曲　国際診療部は、治療まで行うのではなく、各科で診療を受ける患者さんと担当の医療スタッフを支援するコーディネーターのような役割です。外国人の患者さん向けに多言語化した説明資料の作成なども行います。

大曲 貴夫（おおまがり のりお）
国立国際医療研究センター（NCGM）
国際感染症センター長／国際診療部長
感染症一般の臨床、病院内外の感染防止対策、感染症に関する危機管理に従事する一方、国際診療部に立ち上げから関わり、外国人患者の診療に尽力している。

ーー国際診療部は年間どれくらいの外国人患者さんを受けているのでしょうか。どちらの国の方が多いですか。

大曲　2015 年度にセンター病院の外来に来られた患者さん 37,250 人のうち 4.6% にあたる 1,732 人が外国籍の患者さんでした。入院患者数だと全体で 17,756 人のうち 3.3% にあたる 586 人が外国籍の患者さんでした。この数字は年々増えてきています。出身は言語別でのデータになるのですが、今は中国語圏の方が一番多く、全体の 3 分の 1 ほどが中国語圏の方です。次が英語圏の方ですね。

ーーたくさんいらっしゃいますね。外国人の方々は受診先として NCGM をどのように知るのでしょうか。日本では珍しい言語の患者さんが来られた時などはどのように対応をしていますか。

大曲　大使館との連携、ウェブサイトのほか、同じ出身国でのコミュニティが発達していますので口コミで知っている方も結構いらっしゃいます。国際診療部では、電話通訳も導入していて、13 カ国語をカバーしています。また、その他の言語についても医療通訳者の登録リストを作っていますので、急に日本では珍しい言語の患者さんが来られても対応できるようになっています。

国際診療の経験が病院全体の質の向上につながっている

国際診療部の受付窓口

ーー様々な言語に対応できることは外国人にとって非常に安心感があるのではないでしょうか。逆に国際診療部があることが、実は日本国内の方にとってもメリットになっているというようなことはありますか。

大曲　漠然とした言い方になってしまいますが、外国人患者さんと接していると、患者さんが何を困っているか、何が不便かということを認識する機会が増えるので、医療スタッフが患者さんのことをより意識するようになると言いますか、医療的な説明を確実に行う、困ることがないように対応するなどの意識が非常に高まるように思います。それは外国人の患者さんに対してだけでなく、日本人の患者さんへの接し方にも良い影響が出てくると思っています。外国人の患者さんに接する時に必要とされる我々の技術や経験が、どの立場の患者さんに対しても活かされることによって、医療スタッフ全体の質を高めることになると思って現場を見ています。

ーー色々な対応能力を要することかも知れないけれど、そこを乗り越える仕組みを作ることで 1 つの部門だけでなく病院全体の質を高めることにつながっているのですね。現在、国際診療部はどのようなスタッフ構成になっていますか。

大曲　国際診療部には現在 4 名が所属しています。全員、何らかの外国語での対応が可能です。このほかに中国語の医療通訳スタッフが 2 名います。必要に応じて増員も検討しますが、立ち上げから 2 年しか経っていませんので人材の起用方法はまだ確立している段階ではないです。若いスタッフの中には、NCGM で国際的なことに関わる仕事を希望する者もいますので、国際診療部もその選択肢になってくるのではないかと思います。

ある日のハラルメニュー『さくら食』

言葉以外にもきめ細かい対応で安心感を提供する

ーー昨年はエボラ出血熱の流行があり、NCGM は国内の疑い患者の搬送先に指定されていましたが、そのような時も国際診療部が対応されていたのでしょうか。

大曲　NCGM には、感染症対策を専門に行う国際感染症センターがありますので、基本的にはそちらが対応します。でも患者さんが外国人の場合は、国際診療部も連携して対応することになります。昨年、中東呼吸器症候群（MERS）疑いの診療例がありました。中東から日本に来られたご家族の女の子が患者さんだったのですが、国際診療部が女の子やご両親とアラビア語でコミュニケーションをとってスムーズに対応することができました。また、食事もハラル食（イスラム教の戒律に沿った食事）が必要でしたが、栄養科と連携してハラルの病院食を提供しました。

ーー宗教に配慮した食事の対応もできるのですね。

大曲　はい。「さくら食」という名前をつけて出しています。外国料理をイメージしていると見た目が純和食なのでびっくりしますが（笑）。患者さんのアンケート結果では好評のようです。

ーー母国語でのコミュニケーションだけでなく食事などにまで配慮が行き届いていた

ら患者さんはとても安心して病院で過ごすことができますね。

大曲　そうですね。昨年１月、都内のホテルに滞在中の台湾からの出張者の方が急病になり、国際診療部があるからと NCGM を受診されました。一刻を争う病状でご本人も不安だったと思いますが、４日間の入院で無事に回復され、病院での応対にも大変満足されていました。

　この話は後日談があるのですが、実はこの方は台北市の大学で弦楽団合唱部の監督をされている音楽家で、10 月に学生たちと再来日した際に NCGM のアトリウムで無料コンサートを開いてくださいました。心温まるご厚意に感動しましたが、「恩返しができた」と逆に喜ばれていてこちらも尚更感激しました。こんな風に国際診療部を通じて国境を越えたご縁ができることも嬉しく思っています。

国際診療部の
通訳サービス

国際診療部で使用する各国の言語による医療用語集
（発行：公益財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部）

台湾の弦楽団合唱団のコンサート

現場の医療スタッフに必要なスキルとは

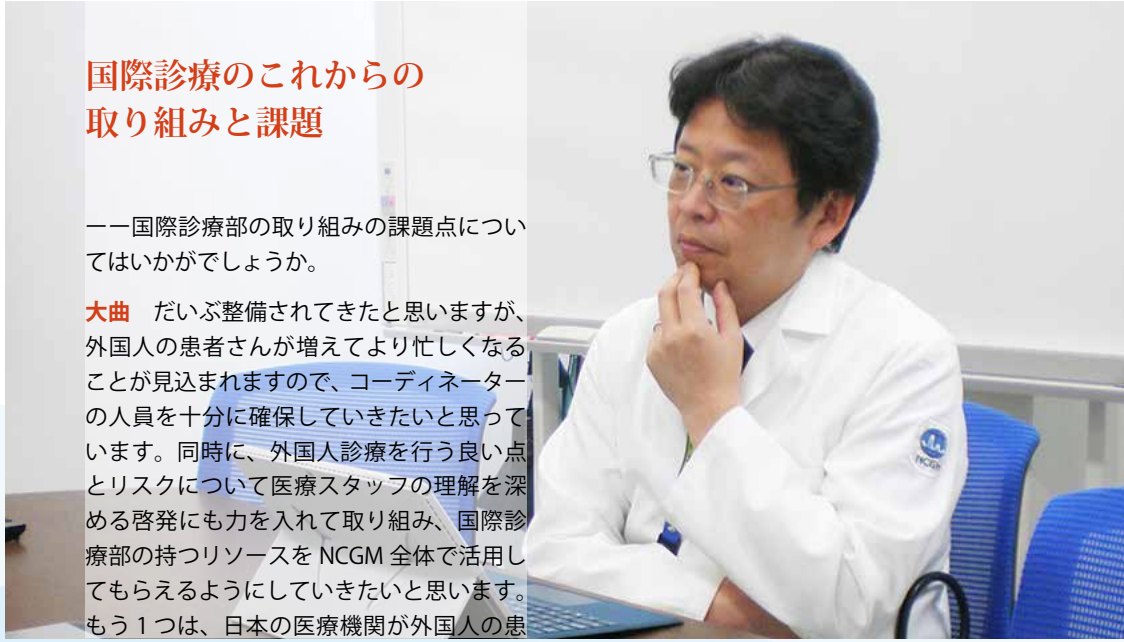
――国際診療部のスタッフに必要なスキルを挙げるとしたら何でしょうか。まずは語学力でしょうか。

大曲　語学力も重要なスキルの１つですが、それ以上に医療スタッフとしての経験や、患者さんと良好な関係を築ける対応力が大事だと思います。医療現場を熟知していると、外国人患者さんの対応に不可欠な事務手続きの抜け落ちなどにも気付けますので、トラブルを未然に防ぐことができます。

――語学力といっても医療分野の通訳スキルがなければいけないので、そういう意味では、語学においても現場経験と同等の高い専門性を持っているかどうかということになるのですね。

大曲　そうですね。医療現場では医療スタッフと患者さんとの間でトラブルが起こるリスクがありますが、言語が異なる外国人患者さんとの間には、対応の仕方や説明不足など、トラブルを生むリスクをより多く抱えていると言えます。早期に医療通訳を介して患者さんに丁寧に説明することによってそのリスクを軽減できるので、そのことを診療する医療スタッフがしっかり理解していることが大事だと思っています。

国際診療のこれからの取り組みと課題



――国際診療部の取り組みの課題点についてはいかがでしょうか。

大曲　だいぶ整備されてきたと思いますが、外国人の患者さんが増えてより忙しくなることが見込まれますので、コーディネーターの人員を十分に確保していきたいと思っています。同時に、外国人診療を行う良い点とリスクについて医療スタッフの理解を深める啓発にも力を入れて取り組み、国際診療部の持つリソースを NCGM 全体で活用してもらえるようにしていきたいと思います。もう１つは、日本の医療機関が外国人の患者さんを受ける上で出てくる問題点について対策を考えていきます。例えば、残念ながら患者さんの中には不正に日本の保険の受給資格を取得して自己負担３割の費用で医療を受ける方がいますが、資格が適切かどうかを見極める必要があります。そのような患者さんを受け続けてしまうことは日本の保健医療を壊すことにつながりますので、そうならないように医療現場でしっかり見抜く力も向上していきたいと思います。

――最後の点は、日本での外国人診療全体に関わる問題点ですね。

大曲　その通りです。国際診療部ができてから早い段階でコーディネーターがこの問題を認知しましたので、厚生労働省にも報告をして問題意識を共有するようにしています。ほかの医療機関も含めて社会的にも認知されるようになってきています。厳しいようですが、日本の保険の受給資格の有無を見極めて費用を請求できなければ、日本の保健医療が回らなくなってしまいますし、日本の保健医療がきちんと回っていることが外国人患者さんを受け入れる素地を維持する上でも重要だと考えています。これから国際診療を本格化させるためには欠かせない点だと思います。

――オリンピックが開催される東京で「国際」を名乗る医療機関としての発展にますます期待がふくらみます。

大曲　それを目指していきたいですね。国際診療部の取り組みを基に研究も進めて、日本国内の外国人診療の充実化にも貢献していきたいと思います。民間企業との協働なども増えると思います。また、国際診療の経験を積んだスタッフが病院内に増え、NCGM が国際的な保健医療機関であるという意識を内部からも高められれば、組織としてもより良い方向に変わっていくと思います。

――ありがとうございました。

INTERVIEW

変革の時を迎える NCGM
グローバルヘルス新時代を生き抜く

明石 秀親　国立国際医療研究センター
国際医療協力局　連携協力部長

感染症の流行など人々の生命を脅かす危機に対応できる新たなシステムの構築が求められるグローバルヘルスを背景に、日本は医療の国際化を成長戦略の１つに掲げ、様々な形で医療の国際展開に挑戦しています。その変化の波を受けて NCGM もまた変革の時を迎えています。NCGM の国際的な事業の今までとこれからについて国際医療協力局の明石秀親医師に聞きました。

明石 秀親（あかし ひでちか）
国立国際医療研究センター（NCGM）
国際医療協力局　連携協力部長
国際協力の専門家としてカンボジアやボリビアなど数多くの二国間援助プロジェクトに従事。近年は厚生労働省が進める国際医療展開推進事業や、企業の海外展開支援などにも携わっている。ラジオ番組「グローバルヘルス・カフェ」（ラジオ NIKKEI）にマスターとして出演中。

「国際」を名乗る ナショナルセンターの使命

――今回の NEWSLETTER は「NCGM の何が国際なのか」というテーマで特集を組んでいますので、NCGM の国際的な事業における変化について伺いたいと思います。

明石　特集のテーマは実に良い問いですね。NCGM は「国際」を名乗っている医療機関ですが、実際の国際的な事業の内容は時代とともに変化してきています。

――最初は組織の名前に「国際」がついていなかったですね。沿革を見ると現在のように「国際」がついたのは、前身の国立病院医療センターから旧国立国際医療センターとして発足した 1993 年となっています。その７年前の 1986 年に国際協力を行う部門「国際医療協力部」（現 国際医療協力局）が設置されましたが、NCGM が担う国際的な事業の主軸として位置付けられていたのでしょうか。

明石　国際医療協力はたしかに開発途上国の保健医療を良くするために専門家が各国を飛び回っているような国際的な事業ですが、NCGM を代表する事業だったわけではありません。現在、日本には６つの国立高度専門医療研究センター（通称：ナショナルセンター）があり、NCGM はその１つとして創設されました。ナショナルセンターは、国民の健康を脅かす特定の病気を治すための医療を提供するほか、その関連の調査や研究、技術開発を推進する使命を持っていて、さらに各センターが専門分野の役割を担っています。NCGM 以外はがんや循環器、小児などの専門分野に分かれていますが、NCGM は唯一、総合医療を基盤とした病院を持ち、その上で感染症や糖尿病、エイズ、肝炎・免疫などの研究や国際協力に取り組んでいます。各部門が連携しつつ、多かれ少なかれ海外に関わる仕事に携わっていますが、発足からしばらくは国際協力の専門部署として活動しはじめた国際医療協力部を含め、各部門がその時々で求められる国際的な業務を行っているという感じでした。

押し寄せる変化の波の中で

――それが NCGM 全体としての取り組みに変化していったのですか。

明石　そうですね。少しずつ変化してきたのだと思いますが、NCGM が国際的な医療機関として国際展開をさらに進めていくという方向性を組織全体で改めて認識したのは、象徴的には２年前の春日理事長の年頭挨拶がきっかけだったように思います。春日理事長が「国際医療協力局のみならず、研究所、病院など当センターが一丸となって、国際医療協力・医療の国際展開をさらに充実・強化するべく取り組んで行く」と話し、個人的にも「そういう流れが来たのだな」と感じました。

――「そういう流れ」とはどういうことでしょうか。

明石　それまでの NCGM の活動の幅がより国際的に広がっていく流れですね。NCGM を取り囲む外部環境にも変化の波が起きているのを感じつつ、その波が NCGM にも届いているという実感がありました。世界で重要視される課題が、従来中心だった感染

症や母子保健に加えて、生活習慣病や新興・再興感染症、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（全ての人が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、必要な時に支払い可能な費用で受けられる状態）へと広がってきていましたし、途上国支援のあり方にも従来の保健医療分野の人道支援としての側面のみならず、外交や産業振興といった視点が加わってきていました。日本国内でも将来の健康長寿社会の実現という目標に向かって新たに「健康・医療戦略」が閣議決定されるという動きがありました。NCGMも国立の組織ですから、当然日本が目指す方向に寄与していく使命があります。こうした外部環境の変化とともにNCGMの果たすべき役割や求められる成果も時代のニーズに見合う方向へとシフトしていく。その必要がある。そういう流れが来たのだと思います。

――理事長の言葉は、まさに組織全体でより積極的に日本の医療を世界に向けて展開していくという宣言の意味を持っていたわけですね。実際にどのような形で進められたのでしょうか。

明石　まずはNCGMの中に検討部会を設置して、各部門が当時行っていた国際的な事業について横断的に情報を共有し、意見を出し合いました。病院は何をするのか、研究所、国際医療協力局は何をするのかといった、新しいあり方を探る議論でした。そして各部門が取り組むことをNCGM全体で見て、グローバルな保健医療分野と日本という国に対してどのように貢献できるのかを話し合い、そこから当センター全体の**「グローバル医療戦略」**の策定に至りました。

医療の国際化ニーズに応じたグローバル医療戦略を策定

――NCGMの中で目的意識と具体的な活動内容が共有されたのですね。「グローバル医療戦略」とはどのようなものなのでしょうか。

明石　今後の取り組みを大きく5つの項目に分けて強化していこうとするものです。1つ目は、新しい形の海外協力活動です。従来のJICAを通した国際協力のみならず、民間企業などとの協力、あるいは海外の医療機関や研究機関と協力協定を結んで、世界中に共同で研究や人材育成ができる拠点を増やしているのですが、このような海外拠点を活用していきます。2つ目は、シンクタンク機能を充実させること。総合病院、研究所、国際協力部門で長年培ってきた知見がありますので、情報収集力を生かして日本の行政や企業などに様々な政策提言や情報発信を行っていきたいと考えています。3つ目は、グローバル人材の育成ですが、海外からの研修生の受け入れや、グローバルに活躍できる日本人の専門家の育成を続けていきます。4つ目は研究推進です。海外拠点を中心に各国と共同研究を進めるほか、国際保健分野の政策の研究にも力を入れていきます。最後は、病院の国際化ですが、今後も増加が予想される外国人患者さんや日本人の海外旅行者などに対応するための医療サービスを充実させます。病院の国際化には、国際的な病院としての公的な認証制度もありますので、積極的に取得していきます。

――これらの取り組みによって日本が目指す「健康・医療戦略」や「医療の国際化」の推進を後押ししていくということですね。

明石　そうです。これで「グローバル医療をNCGM全体として進めるぞ」ということが

NCGMのグローバル医療戦略

1 海外協力活動
- 海外拠点への専門家派遣
- 災害支援

2 シンクタンク機能
- 企業・団体への海外展開支援
- 情報収集／情報発信
- 政策提言

3 グローバル人材の育成
- 海外研修生の受け入れ
- 日本人専門家の養成

4 研究推進
- 国際保健政策の研究
- 海外拠点での共同研究

5 病院の国際化
- 渡航者の健康管理
- 外国人診療の体制づくり

打ち出されたわけです。国際感染症センターが国際感染症対応に関する役割を国から与えられてきたほか、センター病院に国際診療部を設置して外国人診療の体制をつくるなど、色々な活動経験が集積されていきました。国際医療協力局も企業向けに海外への事業展開を支援する活動を開始しました。

国際医療協力局主催の企業・団体向けの国際医療展開セミナー

新しい国際的な活動が生まれている

――今までになかった活動が生まれているのですね。

明石　「国際」という括りに含まれる活動が非常に多岐に渡ってきています。NCGMの中だけではなく、国全体としても新しい仕掛けができているので、そうした外部との協力による活動も増えてきています。例えば、厚生労働省には医政局の中に新しく医療国際展開推進室という部門ができました。

国際緊急援助隊（JDR）の感染症対策チーム

この医政局では2015年度から「医療技術等国際展開推進事業」という、日本の医療従事者や医療関連企業の技術者たちを途上国に派遣して技術移転や製品の普及を目指す取り組みが開始されました。その年は13カ国で35もの事業が実施され、NCGMは事務局として採択された企業・団体のサポートを行っています。また、エボラ出血熱の世界的な流行を背景に、これまでの国際緊急援助隊（JDR）の中に感染症対策チームを作ることになり、NCGMも協力しました。

――この2年で急速に状況が変化しているのが伺えます。

明石　そうですね。大きな流れが来ていて、今まで通りのことをやっていてはいけないと感じていますし、国際的な活動の幅が広がる一方で、どこまでNCGMが関わっていくのかは十分に検討しながら進めていく必要があると思っています。

変革を恐れることなく さらなる発展を目指して

――この変化についてどのように捉えていらっしゃいますか。

明石　個人的には非常に面白い転換期だと考えています。つまり「国際保健」や「国際保健医療協力」という分野は、これまでは一部の人たちが行う“ニッチな分野”という位置づけだったと思いますが、それが世界の中でいわば“メインストリーム化”する現象が起きていて、それに対してNCGMそのものも変わり、もっと組織全体で取り組まなくてはいけないという意識の変化が起きているのだと思います。世界ではいつどのような健康問題が起こるか分かりませんし、一方、ICTをはじめ、新しいテクノロジーが続々と生まれてくる中で、NCGMが内部でも外部でも様々なつながりを持って医療の国際化に取り組む機会が増えるのは良いことだと思います。

　最近では、NCGMの臨床研究センターがベトナム、インドネシア、フィリピン、タイの4カ国と国際共同治験を行いたいということで、現地に詳しい国際医療協力局が一緒に取り組んでいます。日本では珍しい病気や、症例数が少ないような病気の場合、国を超えて治験を行うメリットは大きいのですが、正確に進めるためには国際的に標

薬剤耐性（AMR）の共同研究を行うミャンマーNational Health Laboratoryにて会議

フィリピンで開催された世界保健機関（WHO）協力センター会議でスピーチを行う春日理事長

準化された方法で治験を行う必要があります。現地の研究員を日本に呼んで育てて帰すことを繰り返して標準化を実現し、何年もかけて治験を行います。こうした新しい展開が増えてきています。

　ほかにも保健医療分野における日本を代表するシンクタンクとして「グローバルヘルス政策研究センター」が新設され、薬剤耐性（AMR）の問題に取り組む「AMRに関する臨床情報センター」も、NCGMの新しい部門として設立が予定されています。

――NCGMの国際的な事業はこれからますます広がっていきそうですね。

明石　そうですね。今までになかった形の取り組みがもっと広がっていくと思いますし、そうなっていけばとても面白いと思います。何かを始める時には制度や規定、理屈など色々なハードルがあると思いますが、国境を越えて色々な業界やジャンルの色々な経験を持つ人たちがつながって、思いもよらない変化が起こり、新しいことが生まれるわけですから。新しい国際的な事業が増えて定着していくと、それがまた自分たち組織を表すものになっていくように思います。そういう意味では、今はまだ大きな変化の始まりにいるのではないでしょうか。

――これからが楽しみですね。ありがとうございました。

KEY WORDS FOR TOMORROW
NCGM のこれからを読むキーワード

NCGM はこれからも「人間の尊厳に基づき、医療・研究・教育・国際協力の分野において、わが国と世界の人々の健康と福祉の増進に貢献する」という使命のもと、新しいチャレンジを続けていきます。少しだけ未来の NCGM の姿を捉えるキーワードをご紹介します。

1 グローバルヘルス政策研究センター
INSTITUTE FOR GLOBAL HEALTH POLICY RESEARCH (iGHP)

2017 年 3 月開催の iGHP 設立記念国際会議

2016 年 10 月、NCGM 国際医療協力局の中にグローバルヘルス政策研究センター（iGHP）を開設しました。iGHP は、日本のグローバルヘルス政策における代表的なシンクタンクとしての役割を持ち、官民学を問わず、あらゆる組織が世界中の研究機関と連携してグローバルヘルスの発展のために貢献することを目標としています。また、政策研究を推進するほか、次世代のリーダーとなる優秀な学者や研究者を育成していきます。

2 世界で活躍する国際保健人材の育成

国際的組織で活躍する日本人の数は依然少なく、これからのグローバルヘルスの課題解決に向けて国際社会で発言力を発揮できる人材が求められています。NCGM は、国際保健の実践的な研修の場を提供するとともに、国際会議等での政策提言の知見を共有して、政府が取り組むグローバル・ヘルス・リーダーの育成に積極的に貢献しています。

3 良い病院の国際規格 JCI 認証の取得
JOINT COMMISSION INTERNATIONAL

病院内に掲示している
JCI に関する患者さんへの案内

JCI（Joint Commission International） は、1994 年に米国の病院評価機構が設立した、医療の質と安全性を国際的に審査する機関のこと。世界で約 940 もの医療施設が JCI の認証を取得しており、外国人患者さんの増加が見込まれる日本では既に 23 機関が認証を受け、今後も増える傾向にあります。認証には JCI が設定する多くの項目で審査を受け、基準を満たす必要がありますが、NCGM のセンター病院は 2017 年 6 月までの取得を目指して取り組んでいます。

4 医療と先端技術による共創「ものづくりコモンズ」への参画

NCGM は、医療分野の新たなものづくりに向けて産官学および医療機関、地域等の連携を推進する一般社団法人日本医工ものづくりコモンズと協定書を締結し、医療機器開発に協力して取り組んでいます。センター病院内で現場の医療機器ニーズを収集し、製品開発を行う企業との連携の可能性を探っています。日本の優れた医療とものづくりの技術を融合して新たな価値を創造しようとする取り組みに NCGM も参画しています。

EVENT INFORMATION

「国際保健」「国際協力」って何だろう？

国際保健基礎講座 2017

1 回だけの参加も OK！

参加費 1000円（学生半額）

現場で活躍する国際協力の専門家と一緒に途上国の健康問題を学ぼう

国立国際医療研究センター　国際医療協力研修センター 3F　にて開催

昨年度実施のテーマ

- 国際保健の基礎のキソ！
- 国際保健の潮流とこれから
- 感染症 vs 専門家！
- 緊急援助隊の活動で見えたこと
- 広い大地と小さな命～母子保健概論～
- 実は要！国際保健と保健システム
- 未来を描くキャリアパス　　など

詳細・お申込みは
NCGM 国際医療協力局
ホームページ「イベント情報」へ

http://kyokuhp.ncgm.go.jp

事務局
国立国際医療研究センター
国際医療協力局　研修課
TEL: 03-3202-7181
Email: kensyuka@it.ncgm.go.jp

感染症や母子保健など、さまざまなテーマで国際保健を学べる講座が全 10 回（年間）。
講義、ワークショップ、ディスカッションを取り入れた参加型です。
5 月から毎月第 4 土曜日 13 時 ~16 時開催予定。

国際保健医療サークル
BRIDGE

＜メンバー募集中＞

2005 年に NCGM 有志スタッフによって設立されたサークルです。国際保健医療協力を志す方ならどなたでも参加 OK ！定例会やセミナー、スタディーツアーを通じて学びながら活動しています。

代表：藤岡（NCGM 看護師）
お問い合わせ：fujiokaafuji@gmail.com

＜ご寄附のお願い＞

NCGM 国際医療協力局では、保健医療分野の国際協力活動の充実等を目的とする寄附のご協力を皆さまに広くお願いしております。ご寄附のお申し込みは、下記の連絡先より国際医療協力局 寄附担当までご連絡ください。

NEWSLETTER vol. 6 2017

2017 年 3 月 31 日発行

国立国際医療研究センター 国際医療協力局
National Center for Global Health and Medicine
Bureau of International Health Cooperation

〒 162-8655 東京都新宿区戸山 1-21-1
tel: (03)3202-7181 fax: (03)3205-7860
kensyuka@it.ncgm.go.jp
http://kyokuhp.ncgm.go.jp

イラスト (ハチ P)　井上きみどり

©National Center for Global Health and Medicine ALL RIGHTS RESERVED.

NEWSLETTER vol. 6 2017　2017 年 3 月発行　ISSN 2186-9650　国立研究開発法人　国立国際医療研究センター　国際医療協力局